

# 追悼

## 伊藤眞徹先生を偲ぶ

—— 調査旅行にお伴した日々 ——

成 田 俊 治

佛教大学元副学長、名誉教授であられた伊藤眞徹先生が去る三月十八日急逝された。すでに大学をおひきになり、ご自坊もご子息（唯真氏、佛教大学教授）にお譲りになり、悠悠自適、読書三昧のご生活で、おみ足が少しお悪いがお元氣だとお聞きしていたのに、突然の訃報は本当に驚きであり、今さらながら世の無常を感じずにはおれない。

昭和二十一年に佛教専門学校に入学してより、佛教大学在学中は指導教授として、また卒業後、大学にお世話になって今日まで、恩師と仰ぎご指導賜った先生のご逝去は、慈父を失ったごとく哀惜の涙がこみあげてくる。

先生は本当に学者らしい学者であった。謹厳実直、寡黙で目立つことはあまり好まれなかった先生。それでいて学生に注がれる慈愛あふるあの眼は私の脳裏に焼きついている。豊富な読書量、該博な知識、史料の精読による綿密な論証という実証的な学問方法は、先生のお人柄そのものであった。

先生の驥尾にふし努力したものの、まだまだ学恩に報ゆることの少ない私ではあるが、三十年に及ぶ師事で、時には御叱正に襟を正し、時にはお好きなお酒のお相手をさせて頂いたこともあった。とりわけ私の最も印象に残り、また幸せであったことは、昭和三十六年度から四年間、文部省科学研究費助成による総合研究『我國民間念仏信仰の研究』、さらに二年間『我國民道徳儀礼の研究』による実地調査に他の先生方とともに参加し、特に伊藤先生にお伴して殆んど全国に旅したことであった。全国各地に民間念仏信仰、念仏儀礼を求めて旅を重ねたことは、私の学問の一方向を決定づけたといっても過言ではない。と同時に先生の隠れた一面に接することも度々であった。

それは平泉や立石寺の見学、そして天童に残る踊躍念仏の調査のときであった。平泉から天童へ入るとき、予定では鳴子温泉で一泊であったが、途中で先生は「成田君、作並に泊

まろう」とおっしゃる。「何故ですか」と問うと「いや別に理由はないが」といわれる。時間的にはロスであったが、ともかく作並に変更して一泊。その翌朝、食事のとき先生は照れくさそうに「実は息子が新婚旅行で作並に泊ったもので、一度泊りたかった」と。家庭のことなどついぞ口にされたことがなかった先生が、はじめてもらされたことで、私は先生の親としての温かい愛情をみた思いであった。

九州調査旅行は一週間以上に及んだが、それは福岡、行橋、天草、熊本での雨乞い行事の調査であった。天草での四十年ぶりの再開という地狂言(『安珍清姫』)による雨乞い行事、鐘つけ、籠り、千駄焚きなど形態の異なる雨乞い行事の調査で、いささかグロッキーになり熊本市に入ったが、熊本で目についたことは不謹慎なことながら女性が美しいということであった。私は何気なく先生に「熊本の女性は彫りが深く美人が多いですね」といったところ、先生は笑いながら「君は若し奥さんから大分離れているからだ」といわれて気がつき、赤面したことであった。先生にはこのようなユーモアを解されるセンスもありません。

大峯山頂での戸閉式の調査のときのこととも忘れられない。先生は常はお元気だったがこの時は体調がお悪かったのか、京都出発と同時に腹の調子がおかしいとおっしゃる。そのうち私もその影響か調子が悪くなり、ともに油汗を流しながら三十分余を必死でもちこたえ、西大寺停車と同時にトイレへ

かけ込んだ。洞川へ着いてからお粥腹ならぬうどん腹で大峯へ登り無事調査を終えたが、まことに苦しかった思い出が残る大峯登山であった。

先生と旅した思い出は尽きない。このような思い出を書き綴ることはかえって先生にはご迷惑で、恐らくお浄土で「いまさら何をいう」と苦笑されておられるかも知れない。しかし先生の『平安浄土教信仰史の研究』『日本浄土教文化史研究』という高著をはじめ、多くの論文を発表され、その学問的業績は周知のところであり、また仏教学科主任、文学部長副学長として大学発展への貢献、宗門そして社会的な業績は昭和五十七年の勲三等瑞宝章の叙勲によって証明されておりここに改めて私が紹介するまでもないと思う。従って私はあえて先生の隠れた一面を書かせて頂いたのである。

先生は名聞利養ということには全く無縁の方で、本当に学問を愛され、しかも宗祖法然上人を思慕された信仰の人であったと思う。臨終を迎えられたとき、手は念珠をつまぐるように動かされ、また右手を二度、三度あげるような所作をされたという。御子息(唯真氏)は、あたかも阿弥陀仏からの糸を引かれているようにみえ、平安浄土教を生涯の研究テーマにした父にふさわしい臨終であったと述懐されている。

最後に、先生の安らかな御冥福を心からお祈り申し上げるとともに、金蓮台上よりわれわれを護念し賜わらんことを祈念して筆をおく。

(なりた しゅんじ 文学部教授)